

写真で巡る 聖地探訪 その2

柴田 長生

新型コロナウイルス感染拡大が未だ収束しない中、今年の四旬節も昨年に引き続いてミサが開催できない状況でした。2度目の「緊急事態宣言」によって新規感染が減少し、聖週間の典礼やご復活祭は教会で過ごすことが出来そうな見通しです。クリスマスマス号に引き続いて、一九九四年の春、洗礼を受けて間もない現在93歳の母が、同じく洗礼を受けて間もない亡き父と共に、聖地巡礼の旅に参加した時に撮影した写真をご紹介します。二〇二一年の復活祭を迎えるにあたり、父母が撮影したいくつかの聖地の写真を手がかりにしながら、イエス様のことが語られる「新約聖書のイメージ旅」へ出かけてみたいと思います。

1 ナツアレットの男

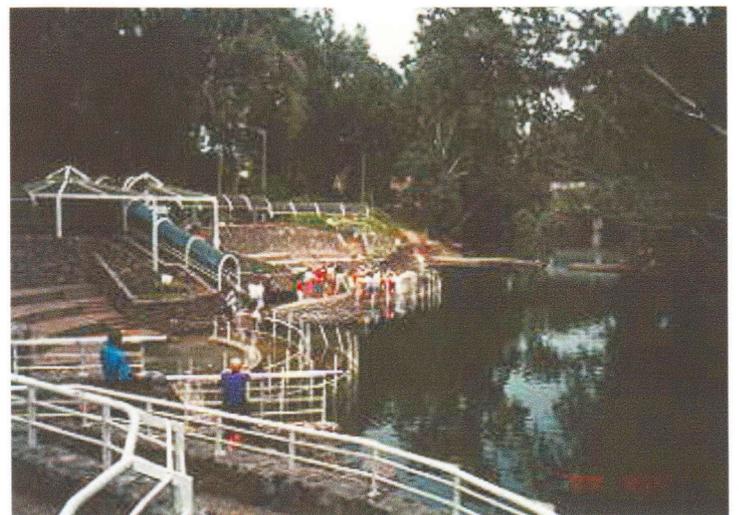
「ナツアレットの男」、イエス様についての様々なエピソードに基づく、岩手の医師・山浦玄嗣氏による名著のタイトルです。イエスは、ナザレの貧しい石工ヨゼフの息子であっただけの男です。聖書は、御降誕のエピソードについては語りませんが、その後はいきなり洗礼者ヨハネによるヨルダン川での洗礼の話に飛びます。写真の場所が、イエスが洗礼を受けた場所だとされています。ここで神の霊がイエスの上に鳩のように舞い降りてきたのです。その後、イエスは霊に導かれて荒れ野に行き、悪魔による試しを受けられたと聖書は述べ伝えます。ただの「ナツアレットの男」におこった、神の霊による公生活の開始です。



1 ナザレ



3 荒れ野



2 ヨルダン川(イエスの洗礼場所とされているところ)



4 ガリラヤの丘



5 ペテロ屋敷跡



6 ガリラヤのシナゴーク

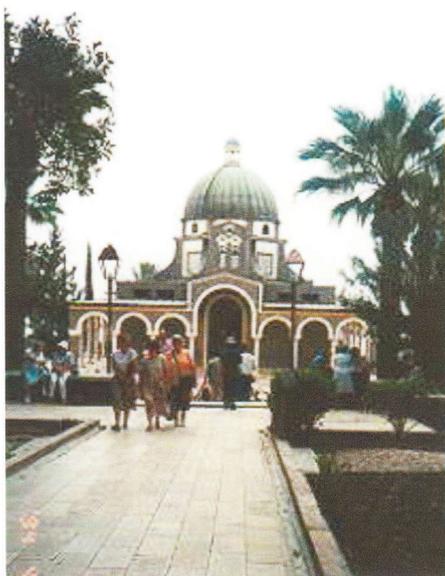
2 ホームグラウンド・ガリラヤ

聖書には、「その後イエスはガリラヤに行き、住まわれた」とだけ書かれています。そしてそこでイエスは、「回心せよ、天の王国が近づいたから」と述べ伝え始めます。その後すぐにガリラヤ湖のほとりでペテロたち4人の漁師たちに出会い、「わたしについてきなさい。あなたたちを、人を捕る漁師にしてやろう」と話されました。ペテロはすぐに網を捨て、イエスに従います。そしてイエスは、ガリラヤ全土を巡り歩き、会堂で福音を伝え、民の病と患いを癒やされます。

3 ガリラヤの風薫る丘で・・・

やがてイエスを慕って、多くの人たちがイエスの元を集まります。ガリラヤの丘に登り、そこでイエスは人々に語り始められます。私たち信者の心の糧でもある「山上の垂訓」はこの時にイエスが語られた話であると聖書は伝えます。「幸いだ、乞食の心を持つ者たち、天の王国は、その彼らのものである・・・」このようなメッセージから、イエスの話が始まりました。「地の塩」「世の光」「汝の敵を愛せよ」「天に宝を積み」「思い煩うな」「狭き門」・・・、イエスのメッセージはあふれ出るかのようです。この中で、「主の祈り」についても教えられました。

あまりにも多くの民が集まったのでパンと魚を増やされた奇跡、絶えず湖を渡り、嵐を鎮められた話などもこのころのエピソードです。ガリラヤは、イエス達のホームグラウンドだと感じます。ガリラヤの丘の写真を見ると、「ガリラヤの風薫る丘で、人々に話された・・・」という聖歌が聞こえてきます。



7 山上の垂訓教会



9 パンと魚の増加教会



8 オリーブ山 主の祈りの教会



10 ガリラヤのシナゴーク

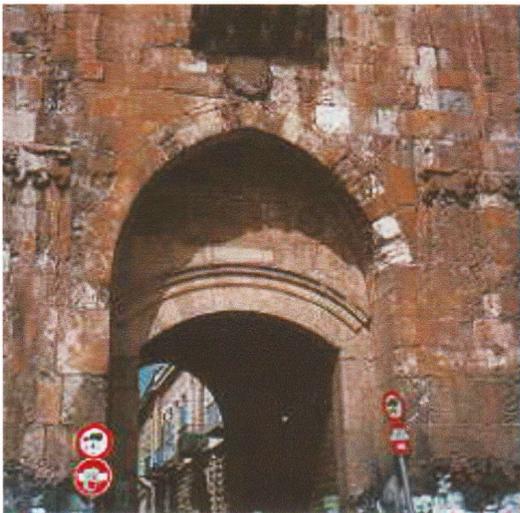
4 救い主の使命を担って・・・

イエスの名声がユダヤ中に拡まってくるほどに、イエスが批判した「律法原理主義者」であるファリサイ派など、イエスを敵視・危険視する動きが強くなってきます。そして、それに屈するイエスではありません。様々な「たとえ話」を語り伝え、癒しの奇跡を行いながら、福音宣教活動を続けていきます。

その頃ペテロは、イエスに伴われて高い山に向かいます。そこでペテロはイエスが光り輝く姿に変容するのを見ることとなります。

「神のひとり子」としての栄光の姿です。

「小さくされた者」の代表であるイエスが、同時にあがない主としての使命を担った「神のひとり子」であるということ。人々は、やがてこの両方の立場に躓き、イエスを捨て去ることになるのですが、この時はその狭間にあって、しかも救い主としての使命をまっとうしなければならぬイエスの姿だけが次第にひとり鮮明になってきます。弟子達も、このことの真理を理解するには至っていません。イエスは救いの完成のために、まもなくエルサレムに向かい、ゴルゴタの丘の終焉を準備しなければなりません。ロバにまたがり、「ホザンナ」という歓呼の声と共に、エルサレムの城門をくぐります。写真はエリコの城門ですが、エルサレムにもきつとこのような門があったのでしよう。



12 エリコ ライオン門



11 変容の山



13 エルサレム遠景

5 救いの完成のために

いよいよ聖なる一週間が始まります。エルサレムの神殿に向いたイエスは、両替商や生け贄の鳩を売る商人の屋台をひっくり返し、「祈りの家を、強盗の巢にした」と叫びます。現在エルサレムにある「嘆きの壁」は、神殿の外壁の一部とされますが、このような雰囲気の場合に向かれたのでしよう。イエス殺害の動きも決定的になってきます。

弟子達とオリブ山に退かれた時に、弟子達に終末について語られます。また、オリブ山の南東麓にあるベタニア村のマルタ・マリア・ラザロの家に滞在されます。この時、マリアはイエスの体に香油を注ぎ、涙ながらに毛髪でぬぐいます。イエスの葬りの準備であったのですが、このマリアが、イエスの実際の葬りを行ったマグダラのマリアと同一人であるという説があります。写真は、マグダラのマリアの墓だとされる場所です。

そして、いよいよ「その時」のために、イエスと弟子達はエルサレムに向かい、最後の晩餐を迎えます。その後、感極まったイエスは数人の弟子を引き連れて、ゲッセマネの園へ出向か

れます。イエスは、その時を迎えるために「血の汗したたる祈り」を一人でされるのですが、待機させられていた弟子達は眠ってしまします。

この時も夜ですが、写真は昼間のゲッセマネの風景です。あえて、この場所の夜はどうであったかと加工してみました。クリスマス号でも、「ベツレヘムの夜景」を加工してみました。それは「聖夜」のイメージでした。そして「ゲッセマネの夜」はどうでしょうか。

ベツレヘムとは、同じ夜でも全く異なる「暗闇」です。そしてそこであったことは、これからおこることは・・・その直後にイエスは捕縛されます。

ちりぢりになった弟子達、その後のペテロの否認など、有名なエピソードが続きます。ペテロの否認の場所には「鶏鳴教会」が立っています。イエスの裁判、十字架の道、ゴルゴタでのご最後へと繋がります。写真は、イエスが十字架を担って歩いた道（ヴィア・ドロサ）とされている場所です。この写真だけ父母が撮影したものではありません。そしてゴルゴタの丘には「聖墳墓教会」が立っています。ここはカトリックに限らず、全てのキリスト教の聖地であり、共同管理されています。



14 エルサレム 嘆きの壁



16 マグダラのマリアの墓



15 エルサレム シオンの丘(オリーブ山)



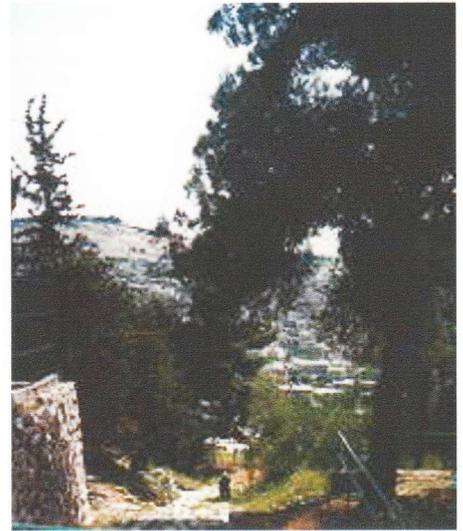
17 最後の晩餐の高殿



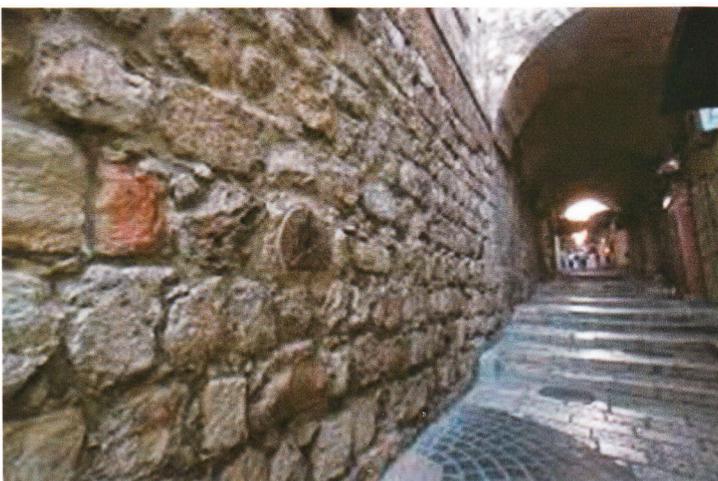
20 ゲッセマネ



19 ゲッセマネへの道(夜)



18 ゲッセマネへの道



22 ヴィア ドロロサ(十字架の道)



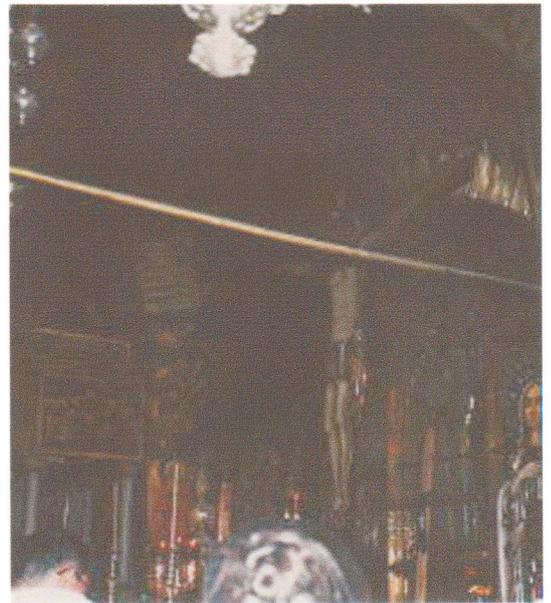
21 シオン山 鶏鳴教会

6 救いの成就

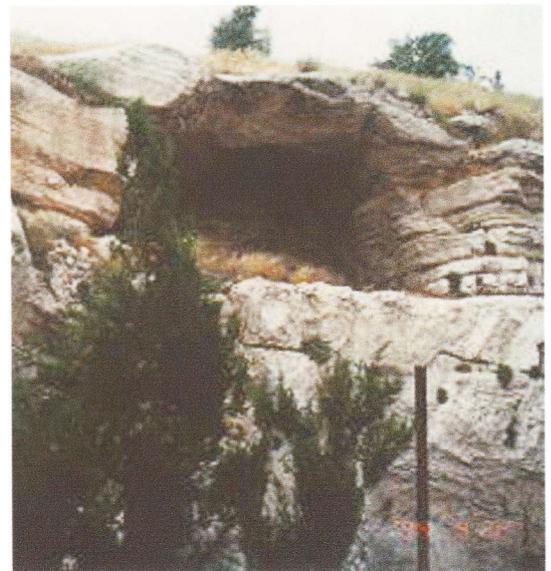
十字架から降ろされたイエスの亡骸は、園の墓に葬られます。現在、「園の墓」とされている場所はいくつかあり、写真はそのうちの一つです。そして、空の墓、エマオへの道でのエピソード、弟子達の前に突然に「シヤローム」と現れ、疑い深いトマスに手を脇腹に差し入れよと語られた話など・・・。

空の墓に最初に駆けつけた者に対して、神の使いは「もうここにはおられない。ガリラヤへ行きなさい。イエスはそこで待つておられる」と告げています。弟子達がガリラヤへ行くと、イエスはガリラヤ湖のほとりで弟子達を待つてくださっていました。

そして預言の通り、イエスはオリーブ山から、「やがてまた来る」と告げて昇天されました。この場所にも「昇天教会」という小さな教会が建てられています。



23 ゴルゴタ 聖墳墓教会

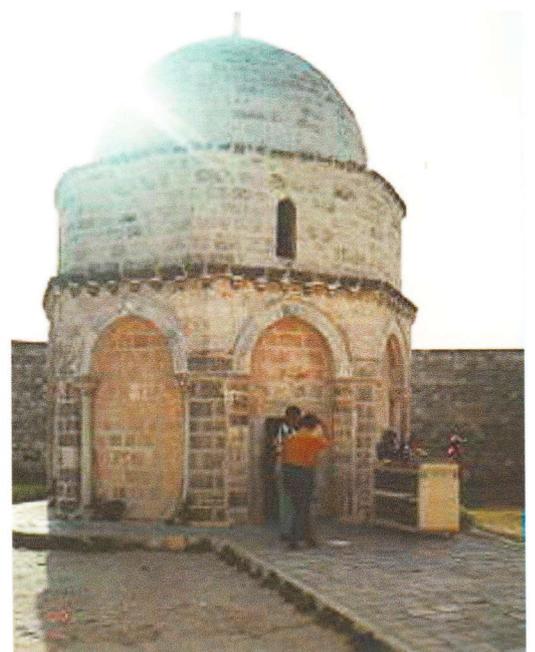


24 園の墓



25 ガリラヤ湖畔 ペテロ召命教会

いかがだったでしょうか。クリスマス号が「旧約聖書の旅」だったとすれば、今回は「新約聖書」の旅です。聖地巡礼はここまでで完結しますが、イエス様のことを全体として大きく触れてみることもいいかなと思います。皆様にとって、新型コロナの長いトンネルを越えて、いいご復活を迎えられますように。



26 オリーブ山 昇天教会